古學先生和歌集

耳雨耳耳書

イ 4
137
44

大学先生和歌

門 僧4
號 137
巻 44

古學先生和歌集

伊藤維楨 著

春部

元日 己卯

[illegible]

年内立春 庚辰

[illegible]

立春閑

[illegible]

湖上朝霞

かすみにハ波の月をかくしつゝ湖や明ゆく空にたつらん

野径霞

春霞あさ野をわけの草の原のはるかにも遠方人の袖の行見ゆ

鶯

人しれぬそこのほかのを鶯のこゑたてゝあさきるにかたる

其の歌しるしまゐらせける

まちわびしまつ人の梅咲ハまつ人のあとをしるしつ人のまつゆへ

故郷梅

かをるらんハ梅の香にひかされて来やとひこしの月もまたみちん

月前梅

卧遊ぶ宿のむかしハ梅かゝに月の光をまちもこそすれ

家の梅花をおりて人のもとへつかハしける

白萩よし梅の花よりも香をとめて色やひとしくのこるまてもかな

夜梅

あやなしや暗ハおほろの中にさへ色の匂ひハ萩のまさりける

友達より小冊の梅の絵を給ひし時書てかへし侍る

前にてハ世のうきことをいふとても色の花のこゑはかりせん

簷梅

梅の花さかりなりけり山里の

あるしとは〻さこそ宿とも[illegible]の下風

家ちかき梅の咲[illegible]

咲初しこゑの[illegible]梅のにほひ[illegible]

四月の比[illegible]

大比叡や小比叡の[illegible]都の世々の[illegible]

家々観春

すゝしさや[illegible]の中[illegible]梅咲[illegible]都[illegible]

遠山似画図

[illegible]乃あき山

春晴

春の世[illegible]白雲[illegible]あけゆく[illegible]

江山春望

[illegible]水の[illegible]

春の歌とてよみ侍りける

山川の[illegible]

ある人の西山の山荘に花見に侍りて

おもへともちらさきを行のうけふしやよしのの山をあらしふくなよ

おもひてそ我はかへらむちる花のこころのうちをしらせてしかな

遠望山花

よしの山まつの花を見ることにみよし野の花をもえにかくれつつ

老人翫花 翁とて老木の桜をよめる

身をしれはあはれとそおもふ老木の花ともにけいる

菴室の前なる桜をよみて侍りしにもたてらるる

けれは

世の中といへはそよそのうきことのたえぬなりけりわかみなりけり

この秋のまへつ桜木一株あり江戸桜といふ人の作る桜

のそれをそ作りけれは海棠ありとて海棠の詩を作り

御そのゆかしき事の文を考へ合せなし大たい海棠とよみて

よろこひけるに紫陽居士といふ人或は桜陰とよみて

家桜花

こころしきも柳さくらを植そへてはるやにほひのやとをしらなん

春月

老の身のはなれぬなかめ春ことに海あふくにもおほろよの月

二月の比人々伴ひて東山なる寺に花見ありきし

咲満る花の梢乃霞みえて帰るさしらぬ春の山かな

春の歌よみてと侍りければ

年ことにまたぬ人なくあくまてはなにゝけふの名残もつきせさる

法眼貞白みまかりて梅の花をみてよみける

忘る人のしら梅をいひける梅のちりさける香のにほひやなつかしき

寿の雪桜

消のたえんやとは花そのまゝ雪にまかふ春の山ける月くもし侍

帰宅の花見にまかりて侍りければ

こゝは山さへ花をあらそふ桂をも筆にもえしれぬ秋の色かな

餘寒月

実もとへて志らぬハ冬の夜の月さえかへりしもおりけりけく

霞かの出たるかなるを見て

けさこそはれぬ山の桜咲そひてまたしらさる宿もまちかねける

九條殿より庵の庭の花を見に読まれて侍りければ

ちりぬとも散らねとも花をまちかねし君の庵のまつる風

同日よみける歌

いろまさるなかれの河の流れに花をうつして

落花

みよしのの月は入ぬるのこさに散花をしらしらん人のこゝろまたるらん

惜花しらを

春きては今しは花の情をもしあるあはれ人のこゝろつくさん

河上落花

しら浪の河の川内まちをすくれ流し又うかびぬる

落花

ちらぬ見るをさそひ来もしけれ桜花雪あとしつは咲なるのかた

羇中の落花

山桜まてしはしいつ花やまの吉野のあけぼの

名所落花

あさり明の月たかはしまの朝かすけまの里のちるの花の色（雲井）

落花随風

春風にちらしは雪のまよひぬる花をさそへる花の跡さそし

落花寐覚嘀山鳥

世のうさをやまにかくれ雪の花ちる山のおのなしかり

牡丹

牡丹をも多くうへしみよしの人のめくらす

花をみるは吹きての何のかけて人のこゝろにまかせてやみん

野径

夕附日さす末乃芝生また晴てゆく野原の末にまよふ蝶のなり

款冬花

山吹の国しのふかたにさきにほふ水にはうつる行きの一入

梅薫風

よはの間のさむさはさらにゆるしけり風の吹くにも春の梅か香

月前花

春の夜の月と花との一時に千々に見る身はいかにならまし

庭前紅梅春は花咲にけり

紅のこそめの梅にさきぬれはいかにしてし庭のいろそまさりし

紅梅に未開紅といふ種あり多き中に常に蘇東坡の

春宵一刻直千金といへる句をしも清まそて作りける

月をさへ花のけふは夜ハ一時をすくのまくらに寝つる事

近江国水口といへる所にまかりしにやとりける家の縁

に桜花おもしろく咲けるをみて

垣ねしろくみゆるまて花さへのこく緑に猶さかりけり

餘寒

春たてと寒き嵐にさそはれて梅さへ霜に月の色まされ

伴ひて桃花をもてあそふ詩のおくに

ちりしける桃の下かけ雪ときえてのこるはなかな

翫しれ

いつも薫る法のあふみに誰かもとらん車の小車

中田氏隠居のおくに

梅か香を人のこゝろにほとにまかせてや見ぬのよ身もしれ

中田氏のもとにて遊し

行すゑもちかふ世のためしあらはれ給ふかけのとも入相のかね

常盤の樹間桜花下

しらなみの寄るかたり世に流れ川も山もなれや花もあはしや

夏部

卯月の此ある人のもとへまかりて侍りし新樹の歌よみ侍りしに

一作影峯氏のもとにまかりしにうえしかたの新樹をよみし

露わけて庭の樹の陰ふかく見てましておなしくかんゝ

新樹風

花の時にのこりし木の本に立よりて葉は風にすゝしき

郭公

卯月のまつ待くらしきて待もあかぬまきにて

五月郭公
郭公いづこ中月の光に時鳥なるらしてしあかつきにきこゆるや

夜深郭公
あしひきの山ほととぎす入ぬる山のはもなく月の影そむかふる

故里火
都にも川辺にとまりてゆめ路は迷ひても猶しのはるる手に

閑庭螢
人もなき庭のまかきの草しけみ光もみえて飛ぶ螢かな

水辺螢
峯の上に見えつる比の影なれや井のなかにすむ水のほたる

江螢
おほ江ふかき茂やみて難波江の風にみだるる螢かな

樹間夏月
夏ふかき庭の木のまにもるる月の影のすゞしき秋かとぞ思ふ

扇をよめる
涼しやとおもふ心の風をまた扇の中にたもちけり

暮の夏祓河の千鳥をよめる
ゆふぐれの川瀬にかよふ風たちて月も涼しき河の夕河

暑の夜大宮勘解由小路のわたりをありきて

涼しさはいかゞ左京の東のはしこえ戸ごとに立てるよもすがら

和歌の浦の芦にて団扇を送りて人の返り待けれは

よみて出し侍る

めぐりしのあし葉おく(小イ)作りそ白露の風は涼しくなりけり

暑の比西方寺といへる寺にまゐりて庵室のおもしろく

井手の山吹しらでこそ住めるなれ

立ちよれはすゞしくなりて木の下の庵もあはれにおもほゆるかな

夕立

小車の牛のあゆみもおそき月の出の道のあたり

夕涼

ゆふすゞみするとて新の櫻ちりぬるを

夕立雲

山の端に雲は見えけれとかゝる夕立の雲

池五月雨

五月雨をふりそめしより大澤の池

さへまさりたる池の堤も水越えて柳の枝もさゝ波そたつ

螢

常しも野をのあさむらそよしし風のさそひし新そよぐらし

玉鉾や夕風ふきたる夕人す草の新をもるをまりたち剣

郭公一聲

わしきたゆきやすらかれ行きてすらくに待ちしなくも

夏艸

みわたせは野のままにけるよおもはるるの道は絶えし

よしきけれ庭の夏艸秋まてはしけきをまつちらとなりえん

夏月

有明の月ま川わたりて夏ふかくいさよひてさなかの夜のそら

早苗

さなへとる小田のますみをいそかなんむらのの岡をそれかけり

秋部

秋立けるに

きのふまて秋たちにし秋の夜はしいつかまりなかしし荻の上風

初秋風

いたつらき外面の木かけ残り合く竹の末をそくる秋の夕川風

七夕

いつまてやの朝気の神すそのらしらなみし夜あさきの神風

くもりなきやみをさへみん七夕のあふ夜待ちし…の文…

萩露

置きならふ庭の秋萩こぼれんとするおもかげの…

荻風

おとしける荻の葉におもかげの風の音のみ…

黄茅岡路秋日晩といふことを

秋寒きをかの浅茅いろづきてゆふ日すゞしき松の志た風

露ふかき宮路の浅茅うらがれて秋の日くらき紀の松の下芝

秋雨

ゆふされば…小萩かたよる…

槿

朝がほの人こそしらね…

扇の絵に今しも読み侍りける

ゆふされば河辺の水の清ければ…

月未出山

更科やまだ出ぬ月の…月のかげさやけき

山家月

家のうしろ…秋…月の…

霧中月

伊勢のうみ清き渚に霧はれてしほ木まてさし乃月をそみける哉

月前蛬

影清き月をあはれむ蟋蟀も人まちかほにあかしかねつゝ

若月思昔

昔の詠しむしの野辺にまよひつゝまなかの末乃月

月前言志

しら川にすむらし人のあるゝともこの月を人のあるとみる

移妻

かしこき秋の松風もしつかなるよにとめなしそのむかし世にまたあるかな

深夜擣衣

誰の女乃今一度あまり寝覚して暁月まてに衣うつなり

近年ありしさ芳園窮きしより秋のころよし世に

きしかたよりの便息もたえむかしなからの侍ひたる人を侍し

をなやみありしとし壬午七月廿八日の夜いたく

暴風ふきしかハかくなんつけ侍りける

世にたえしよりまことに人の草木のさかりにしら川にみをかはる

名所擣衣

秋風のさむさにたへて河瀬のきくはいろまさりけり

菊をうゑてよめる

植しおく花のいろしるく咲そめし其あきしるべのむらさき

菊粧如錦

庭の入口にしげりふきしたみしさきをなきみ菊のもみぢば

山本通主菊十首の歌讀し侍りしときに　始開

咲初しはつ一枝をはやなくもおもしろうてさく庭のむらさき

菊久盛

さかりとも見えしもえしさへ菊のうつろふ花の色をこそ見れ

菊似霜

おきそふるいろをあはれむ菊のうへのしもかまかふなりけん

菊帯露

おく露はそれとも見えず朝日影さしてなびく白菊の花

翫庭菊

としをへて色もかはらぬ垣のうちにこゝろをとめて見る白菊の花

菊滿庭

うへしより秋をかさねて菊の花さかりこゝろは庭にあまりぬる

移庭菊

人とはぬ庭のあさぢの露の中の庭にし百花咲るあさのしらきく

菊薫枕

白たへの風の便りのそれならでまくらにちかき庭のしら菊

隣菊匂

うつろへる色こそみえね秋ふかくとなりの籬にしるしらぎく

秋霜

冬月のあかつきの月のかげさえてしもの色さへさむけき

曉月

あさぢふの草の葉ごとにおくしもの影になかしてあかる月かけ

紅葉交松

此山の朝日にはえる色しげの上の紅葉よりまじる松もみゆる

秋の歌よみしける

しぐるる籬の草の葉枯くさびしくもみるあさぢの山里

客

ゆふさりの浅茅のうちに鳴く虫の鳴くねしのびにそよとしも

鈴虫

はらぬまさき白露のうへの萩がえを照月のひかりにあはれなる

雲間雁

白雲のたなびく山はあさ霧にへたてられてみえすなりけり

虫声幽

衣やうすくあきの夜すからなく虫の声も哀れにきこゆなりけり

八月十四日

今よひは宇治川あくまてなかめなん明日の夜の月の光はかはらても詠八

橋上雲

立かへる宇治の白さきあさ霧に月のかけさへへたてつるかな

隣家擣衣

よるよるはねさめかちなる今宵より隣のきぬた打やかはらす

此短冊真跡。藏在岩城氏家。

八月十六日嵯峨へまかりてゆふさりつかた侍る

山の端に入日のかけもさしなからあらたなる中そらの月

岸田氏の何某秋の比東のかたへ下りけるに侍りしを衆園の

比なれは旅ゆくなれは待りける

秋の夜のさやけき一声のうつるなかさそな鳴鴫のうしや旅ゆくらん

月前納涼

月影に柳のかけはゆくみなと人の待ける涼しさはまたしらぬ

吉野山ちかき所にて

ゆく秋の風の吉野の山ちかしこよひのころやまた見ゆかへイらん

雑歌とて

なかしくになにハの浦のあまならはおもひくハ人に命かへまし利

山家暮秋

重撰集出

志かしなく鹿の音のみしかれくさびしくのあきあきの山里

月欲レ傾

ふかきよの雲のけしきのなかなかに有明の月を待えあかし津

七夕

さのしるき語らいひ和てたなはたの宵なかきの空まちわたるらん

暮秋

さびしさハむかしの音かり月見てし庭にもまつの葉も皆もかれたり

秋の歌とて

人もなくて夕さびしき庭の面に桐の葉かれるあきさの風しるらむ

初秋雲

秋きぬと風のいろはえ見ねとも夏の山端の雲そたつなる

草花色々

いろいろに乱れてさく萩のなかに白妙のたくひなき尾花かな

露草花くまなくきえて

あしたのはきのちるをさへみるかなしみ結ふともあと一志行ふしく

九月十九日等持院の説楓 詩のだいに

秋ながらまださきしるはの色なれやあらしの紅まちに楓さへ

初秋風

吹風や萩の下葉のそよぐより秋とは袖にまづしられけり

月前萩

萩がえやたわむばかりに秋風にさそはれたてる宿の月かげ

月与秋久

秋ごとに月ハかはらぬ光なれど千代もちぎりをそへてまし

又十五夜の月隈もなく晴ければよろこびて

まれなりとあふぎし秋の今宵しもいつにまされる照まさる月影

冬部

初冬

冬来ぬとけさは時雨のおとづれて庭の木の葉の色ぞぬれゆく

神無月風に木の葉のちりはてゝけさは時雨に嵐ふく峯

初冬霜

おけば来し庭のよもぎのあさ霜やまづ葉にさし秋の夕ぐれ

落葉

朝な〳〵庭の木の葉の数そひてきのふにまさる冬は来にけり

庭に菊を見て

霜かれし花のきしにもさかりとは残花なきさ比の花と見るかな

同し心を

霜かれし草はからぬ枯るともまた花さく庭のしら菊

寒草

折々のなこり兒かれる枯草の末にかすかにひとしほにしき

冬菊

時雨の音さひし世の夢ふりさめて聞く霜夜の小夜やふけぬらん

冬月

さえ渡る雲路さへ清き暁にあきらけし月のおちかた影ぞかなし

浦千鳥

浦ちかく立つ千鳥のこゑさむくきこゆるなりのしるへ

寒松

霜のあさ起出て見ればしもしろし結ほれし松風の音の寒さ

初雪

初雪の降りつもる今朝の梢にかくれて冬ぞさびしき

庭上初雪

さ川雪のこほりしかならしへとさまし今朝くれの庭の松かえ

神山の峰小山の雪の神さびてうつりし影を見るかな

さゆる夜や都のそらも冬あさく奥さへ山里に雪ふりにけり

竹雪

まがきなる竹の枝にもつもる雪の清きに見えて落る世の中そなき

深夜聴雪

風さえてさむきやふくらんまよふ夜の雪の村竹しのにをれつゝ

埋火

あらましに居の庭なる埋火のそこはけふのとおもひ出にけり

嫦妻の袁に作りけむ池水もさえゆくをと

新しく見ゆる蘆田の池水はこほりにけらし秋夜の月かな

竹雪

照る竹のすゑにも見えなくに打はらふけさの雪しろきかな

山家落葉

さびしさもしらぬ木の葉に清ければあしたの庭の山陰の庵

冬池月

月影もさえゆく中に池水乃むすぼほれ氷はさしくだりけり

山雪

中々に見ずもあらしむべもなしむかしを見せぬ雪の山

山家雪

降ゆきにあともたえたる山里は雪より出る煙のみ継

山家雪朝

さしこもり都の人をまつの戸もあけぬるや今朝の清き白雪

山家雪

雪ふかくけふも人めは山里にいとゞ住身ぞあはれなりける

十月の比平安へかへらんとせし時桜のいとめづらしく咲けるを

見るとて

冬ながら花あるさまをみるよいつゝくへてみよ山さくら花

初冬月

おしなべてさむけき山風に浅茅かくれしあさの月かけ

池水半氷

山陰の池の氷のなかばまでとけてさざなみひるの汀を見るらん

山家落葉

初風の吹くや四方の紅葉をふきちらしとふ庭の山陰の庵

冬月

木の葉ちりて人もまたみぬ庭の面にひとりふけゆく霜の上の月

冬の夜のさむさの河波さえて氷の上にてらす月かけ

十月の比東山ちかき所に侍りし時遠山を見侍りて

一佐山人の住まゐはみえすなりにけりかくれかをとふ

山人の薪こりおくしをりし跡四方のあらし

落葉

さそはれし名のみはのこる雨なからおなし山のは

浦千鳥

浦ちかく声よりかよふ夜をさむみともよひかはす

宴夢の表よまる

いさゝかに宵にうつつの夢を友なる夜はさめてあけぬ

文化十四年丁丑孟春十二日。久城氏贈仁齋先生真跡短冊一葉。依て此の字以真跡校合。

深夜聴雪

雪をしもあしたに見るを夜のまゝに窓にて

呉竹の夜の更けしも風さえて窓ちか川雪や夜

冬月

霜消る袖乃月影さえくぞ床のまくらに

雑部

中庸戒慎恐懼の心をよみ侍りける

おもひのうちに身の外に道にそむかぬ

貧家の歌とて人読なると見えしをよみ侍りける

うけつたへし万世のむかし思ひ出て神の季しるき庭のさくら花

あはれさる庭ともなきまめる月をとらしの閨の上にたえうらん

風となる竹の枯葉をそのまゝに猶ものあらさしらまほしけれ

禫祭の日服をぬぎしとき作りし歌

ことあらしときまとし かたみ（ほとイ）の衣をあらためしかぬきかへつるふし衣の袖

嫡妻の喪中に山形右京門大夫宗堅丈（弔イ）より歌よみてをこせける返し

おもひしれ別れし夜床のまくらより明けぬる雨前と川

こゝろをまへぬ絹の袖をぬらしあかしをるそての露しるしを

同じ月妻のきらきらしきてまへて来りけり

人ありかし哀れなまはしらかくらり思ひ出ありかなきものなりの歌

鐘声何方

きつ南風のをましてかしこまりをしやあかのあかなる声かのかなた代

海邊眺望

和田の原八重の潮路たゞ夕なぎさにこぼれ丹の釣舟こゝにほのほのを

有馬の湯あまたの人のまうけし小松ヶ原讀てよめる歌

ためしありし有馬の温泉そ猶名世の京の風のふるきなりとよ

丹後国なる人のまうけし有馬の錦をたてしをる作りける

おきまよふはいつやとさとはいまはなくさみのありあけの月

小野よりおとろへたりける時よみ侍りける

角もなきあはれとおもひしをかはらぬ山のはの月乃居

寄道述懐

敷島のやまと言の葉のみちをわけてはるけき八千の葉の道

閑中燈

あきらけき光をなにゝたとへましかゝる文のかゝげし火

天正三年四月廿二日禁中にて古今集御伝受竟宴侍り

しに寄道祝といふことを講ぜしめられ侍りし

萬代もかはらぬ道ぞしき島のたえぬはるかにつたへきぬらん

寄道祝

和国の人のこゝろを種として言の葉しげるみちぞさかえし

小原公（宗イ）以老母八十八歳の賀によみ侍りける

八十あまり八年をへぬる玉椿かはらぬ八千代のはるもしらまし

庭雪

ふりやまぬ雪をよそにて庭の雪月の影やとさへぞさえん

うつりゆく庭の松がえ年をへて変らぬ君が代の人ぞさかえん

人の影の侍りける人の歌をよみて侍りけるに

あらましにたゝむらくさけしつかにや庭の木の葉も打ちらし覧

寄舟述懐

法ならぬみちはあまたの法の橋に舟こそ絶えしや世をわたりまし

人の影をみてよめる

よし世をさかしらおもはぬ稀しせしそれは面影をうつしてけるよ

寂イ
蓮輪法師のもとにまかりけるにえあはでかへるとて

宿りとふかひこそなけれ光をもそへてかへりける也ゆふ暮

まくらしぞのま月もくもりなき影をうつすの池のゆふべの古寺

深山秋

何となく大山のゆふへはけしき松風さへやこゝろすむらん

江州水口より京へまかりし時大津にとまりて暁勢田の橋をわたるとて

夜をこめて起て粟津の原をかりてあさぢふさらし勢田の長橋

影見えしなにはほのかに見えしあかつきや影見えし勢田の長橋

今朝は神を祈りしあとも見えて夜深きよる粟津の原をおもひけるに出し今按するに神の恵みをいさ部むかし

冬の花をたのみし山本氏にもとめて見えさせつは跡の詞

九月四日

仁齋

雜下恐有脱字。

こほりゆく草津石部のさとをゆく

伊藤長胤

近江路や三上の山を右になし左になして草津をもしつ

古寺鐘

うちしきりけせやらん初瀬山まつのあらしに入相のかね

庭前の松をよめる

松にとまるうをとめく揺しまつの雲かしちのさそひてきえかねし

寄竹雑

君よはふるとしへ竹の葉ちるころちあらしのよはつく

覃按重出。

幽居即事

風わたる竹のかげ水を手にむすひて樽にむかふさむしろ

采か燈

影あかくさえてすみなす燈をともしつつねくむかふよなよな

雨除る夜灯をむかへて

雨続くよるのこころさそひてすむにけるかなねぶり

扇をよめる

扇をもて暑きかぜをも待さるになかむる月をそよとなる

四休居士の汨纈安樂の法といふものを觀てよめる

ぐくゝくかゝうりぬあられ我かゝりよはしつのふたゝるひとゝをゝるへく

老後述懐

今さらてハよそ存命しゝくりかあめひくゝをしむゝしくやしき

寄月述懐

世の中をうて一ゝゝりてゝへし惜ゆくゝる身をいつまえん

寄石述懐

沖中の蔭を怪とる岩たゝしてちゝはなるゝとのつて我身なりけり

述懐のうたとよめる

我身世を安柄小世くあらしまのとゝうしと語く人のみるらん

寄河述懐

風吹ハ砂波をなれ河の我の身をかゝれゆくしのこゝろ

思往事

新くしゝ手かくしほりしぬゆ我かれしきのやゝるゝを芳しなかりけり

夜は法を寺近の母衣まつり侍りしを六十年しける

秋さてそちるや柞の木の本のおちくをとゝくなとしぬ露を見るらん

伊藤淳篤身まかりけりと付我がゝにゝりける

人のむかしもあ人を見まける世の中あるかゝれゆく空をさゝしく絶しき

老後むかしへ侍りける

むそちあまり老ぬるまても[illegible]けふのまとゐそうれしかりける

若艸をよめる

故郷に行てみれはかきねにも[illegible]やはらしき[illegible]の[illegible]

松

霜雪にもみちぬ松の葉のこと人のこころのしつかなるよ

斯民也三代之所以直道而行也といへるを

人はたゝなほきをまもれ月も日も行かふ道はかはらさりける

扇の繪に芦毛の駒ひきたるかたかきたるを

雉子なくやうけらか原にほのかにも[illegible]小野[illegible]

山中無暦日といふことを

山里はきのふけふとも[illegible]さく花にこそ[illegible]

住人のよにしられぬ[illegible]山庵のなにしかもあはれしるらん

水樹多佳趣

春なれは池のみきはの波よりも水草のみとりなかなる

嵯峨にすみ侍りし人の家の墓にまうてて

あらぬあきもあらしの山の紅葉のあはれ[illegible]

鴫

秋をしる人やなからん[illegible]沢辺の鴫[illegible]

最勝四天王院障子名所和歌四十六首

春日野

かすがのやまだ川こし若菜つむ雪の白かりけり

芳野山

雲とみし花はちりしも文字のこずゑにのこるよしのの山

三輪山

霧ふかみさしは杉を切りしをつるらむ三輪の山本

龍田山

たつた山ゆくしぐれの秋すぎて散りぬらむ峯の紅葉を

初瀬山

ちぎりしや杉の戸は秋の風もや月のかげもおもかげ

難波浦

なにはがたや梅の下風吹きけらし浪の花さへ白妙にして

住吉浜

うらうらと入江の松のあけましおしほ風のはやき

芦屋里

あしのやのあまのたく火のかげならむ夕暮かけて螢みゆなり

布引滝

ときしくもめかしはやまに袖の上に落る布しのつれ

生田森

しくれゆく生田の森の下紅葉ちりや今も床は名くしかり

和歌浦

まつ峰や有明の月のかたふきて芦辺の浦の声も木しまな

吹上濱

あまのはら吹上の濱の浦風に月もさえゆく夜はのいさ利

交野

狩暮し交野の原をたとりきて淀の流や月やさえ見ん

水無瀬川

みなせ川菜のしけれは世をしらしまかけてるしのちかたにけゆ

須磨浦

あさゆふにもしほのけふりを焼あまも月にはいとふ須广の蜑人

明石浦

浪路ゆく舟もしはしとしほまちて有明の月乃かけのこしけり

錺广市

ますらをかしかまの市に立民のそのうちも見ゆ月そさやけき

松浦山

あらしふく峰にすむ月かけを松風の山にわしるゝ秋のよそ

因幡山

ほとゝきす鳴ていなはの峯にまつとしきかはいま帰り来む

高砂

高砂や松も老ぬる秋風に月やむかしの友となるらん

野中清水

ちきりてし野中の清水今はたゝわれしのふらむむかしなれや

宇治川

水くらき舟よりうへにあらはれてゆふ霧こむる秋の山かせ

大井川

大井川よその紅葉をさそひきてみなそこまてもなみのいろかな

鳥羽

あきはふくるよの空に月みえて稲葉の風にあかしつるかな

伏見

つきはそらに稲葉のつゆをふみしたきて伏見の里にあきはきにけり

泉川

月かけのしくもみちちる泉川旅のこゝろもあはれなるかな

小塩山

をしほ山まちいてしあきのよはの月小塩の原もさやけかりけれ

相坂山

あふさかや山の杉むらかすむ日は関のこなたも花の香そする

志賀浦

春の日もしかの浦人いとまあれやをちの坂松にかけて糸つむなり

鈴鹿山

すゝか山秋をやさりしめくりなれてかへるもしらぬ峯のはれゆく

二見浦

ふたみ浦松のむらたちのみえかくれ霞のうちにまかふいろかな

大淀浦

大よとの松はいくよをすきぬらん雁の道のしるへなりけり

鳴海浦

なるみかたゆふしほみちてなきわたる浦の上にはうかふむらとり

濱名橋

あさ霧やはまなの橋もたえぬらん雲の上ゆくあさての旅人

宇津山

うつの山こえてそしれ世の人のうきはおもひのつたの細道

更科里

しなのちや秋ゆく人の旅の日数へて月見るころもさらしなのさと

富士山

時しらぬ雪の中より川上にかゝる雲まもはれぬふしの山

清見寺

きよみかた有明乃月のかけそへて波にうかへる三保のうら松

武蔵野

月かけのかくるもしらてはてもなく行末しるし武蔵野乃原

白河関

月影にこえて故郷を法しのふ川の関のあさきり

阿武隈川

君か代はあふ隈川のあさからぬ流を千世やくみてしるらん

安達原

風さむくあたちの原のゆふくれに秋の末の露そしく涙

玉造

風さむく身にしみまさるの旅衣かへりみすれや麻の袂まてかはく

安積沼

真菰葉の月あかりするあさか沼のゆふ霧たちて波もわかれす

塩竈浦

はるかにやなみしほるにまつかけのかくれゆくしまのしらなみを

原芸菴老兄鑑與をおくり給ひしを

海なるゝ鏡（鏡しくイ）にうつし人ごとにあかぬとこのうらのもしほぞをしき

海士橋立

たのしきはゆふなぎの橋立や與謝の入海のはるかなる明石のうら

點六十四首内諾點七首
今攷五十六首傳寫八首の點を失ひたるなるべし
覃按六十三首點あり一首點闕

古學先生和歌集　終

予わかゝりしより稽古をなし師傅をもとめて歌をもよみ識者に見せけるに諸家の説どもさまざまありて花晨月夕折にふれて何の興かはなかりしをいたづらに過ぎぬ出でて歎き先生とともに歌の風情をまなびける又諸度書を集めて見れば定めてひとつにまさるはなしほく侍れども志ある人のいまにむかしをあはれむ又人ありまさるこのまよりあまたの歌どもの中にはこの伝には唯この集に歌の點をとめてとりて侍れども老後の慰めにもとめしものなれまゐらするものにあらず定め點をかく侍りぬ古人をしたふものゝ歌をも集め自歌合に名付けてこれを侍れば人にみせまほしきなれ

元禄癸未のとし二月中旬

洛下老布衣　維楨題

明治壬辰のとし四月下浣東都紅橋畔寓居にて

蕉陰居士記之

[illegible]